



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Autistic Burnout のリスク要因についての文献研究 : 過剰適応とその関連概念に着目して
Author(s)	柴田, 珠里; 千田, 若菜; 三田地, 昭典 他
Citation	子ども発達臨床研究, 22, 119-126
Issue Date	2025-06-20
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.22.119
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95698
Type	departmental bulletin paper
File Information	09-18821707_22.pdf



(和訳) Autistic Burnout のリスク要因についての文献研究

ー 過剰適応とその関連概念に着目してー

柴田 珠里¹・千田 若菜²・三田地 昭典³・岡田 智⁴

要 旨

過剰適応とは、内的適応を犠牲にして環境要求に過度に従う現象であり、強い心理的ストレスを引き起こす要因とされる。わが国では自閉症の就労者におけるメンタルヘルス問題のリスク要因として以前から知られている。職場適応の過程で、本人の限度を超えた多大な努力を強いられることで、重篤な精神的問題につながる可能性がある。近年わが国の研究では、過剰適応の結果と autistic burnout の類似性が注目されている。一方、英語圏では過剰適応の概念は取り上げられることはなく、社会文化的背景からこれ以外の類似概念が使われている可能性が高い。本稿では、過剰適応と英語圏の関連概念（完璧主義、カモフラージュ、適応モーフィングなど）を比較し、autistic burnout に至るリスク要因を探った。また、「視点の断絶」と呼ばれる現象も浮き彫りにすることで、就労支援における支援者の理解や配慮のあり方について議論した。

キーワード：自閉症特有のバーンアウト、過剰適応、カモフラージュ、適応モーフィング、
自閉症の就労者

問題と目的

過剰適応とは、内的な欲求を抑圧してまで環境からの要求や期待に過度に従おうとする状態のことで、しばしば心理的ストレスや内的適応の問題を引き起こす（廣川，2021；石津，2006）。わが国において過剰適応は、自閉スペクトラム症（以下、自閉症）の就労者におけるメンタルヘルス上の課題のリスク要因として認識されている（千田，2015；志賀，2015；杉山・高橋，1994）。近年の文献では、自閉症傾向のある人々は特に過剰適応

をしやすい、対人関係や社会的行動に困難を抱えながらも、環境の要求に適応するために過度な努力を払う傾向があることが示されている（千田・岡田，2021；本田，2018；杉山・高橋，1994；横田ら，2011）。その結果、過剰適応によるメンタルヘルスの問題は、自閉症者の生活の質に大きな影響を及ぼしている（横田ら，2018）。

近年の autistic burnout（以下、自閉症特有のバーンアウト）に関する研究を概観すると、過剰適応の結果と共通点が見られることがわかる（千田，2015；千田ら，2025）。Raymaker ら（2020）に

¹ 横浜市発達障害者支援センター

² ながやまメンタルクリニック

³ 就労継続支援 A 型事業所ジョブサボ

⁴ 北海道大学大学院教育学研究院子ども発達臨床研究センター

よると、自閉症特有のバーンアウトは、極度の疲労、スキルの喪失や退行、感覚過敏などの自閉症特性の強まりが特徴とされる。わが国の研究文献では、特に自閉症の就労者において、過剰適応が自閉症特有のバーンアウトの一因となる可能性が示唆されている（千田ら，2021；Keating et al., 2024）。

このようにわが国では、自閉症の就労者の過剰適応とメンタルヘルスの問題が重要視されているにもかかわらず、英語圏ではこのテーマに関する研究はほとんどない。この研究の乏しさは、過剰適応を表現する用語の社会文化的な違いを反映している可能性がある（千田・岡田，2021；千田ら，2021；Keating et al., 2024）。このような課題を受けて過剰適応と自閉症特有のバーンアウトの理解を深めるために、本論文では（1）自閉症の就労者における過剰適応に関するわが国の研究文献をレビューすること、（2）英語圏の研究で議論されている完璧主義（Turner, 2024）、カモフラージュ（Hull et al., 2017；Lawson, 2020）、適応モーフィング（Lawson, 2020）といった関連概念と比較すること、（3）自閉症特有のバーンアウトに至るメカニズムやリスク因子を整理することを目的とする。そして、これらの要因の影響を軽減するための実践的な示唆を提供することで、自閉症の就労者の生活の質を向上させることを目指す。

方 法

本研究では Google Scholar, J-STAGE, CiNii Research, ResearchGate を通して文献を検索し、ナラティブ・レビューを行った。レビュー対象となった論文は、2012 年から 2024 年 6 月までに発表されたものである。検索プロセスにおいて、「autism（自閉症）」「over-adaptation（過剰適応）」「employment（就労）」というキーワードを用いた。検索の結果、合計 78 本の論文（日本語 74 本、英語 4 本）が抽出され、そのうち研究テーマとの関連性が高い 15 本を選定した。また、レビュー対象となった論文の参考文献も追加の知見を得るた

めに検討した。

さらに、英語文献における関連概念と比較するため、Google Scholar および ResearchGate を通して「perfectionism（完璧主義）」「alexithymia（失感情症）」「boundaries（自他境界）」「autistic traits（自閉症特性）」「autistic burnout（自閉症特有のバーンアウト）」「camouflaging（カモフラージュ）」「passing（パッシング）」「adaptive morphing（適応モーフィング）」といったキーワードを用いて追加検索を行った。検索の結果、自閉症の就労者の過剰適応に関連する 15 本についてレビュー対象とした。

本研究の目的は、自閉症特有のバーンアウト、過剰適応、および関連概念の関係性を明らかにすることである。そのため、背景因子、リスク因子、前提条件、有害な促進要因、保護因子、対処方略について探索的に検討した。得られたデータは体系的に表に整理し、分析を行った上で概念図としてまとめた。

結 果

表 1 に示すとおり、わが国における自閉症の就労者の過剰適応をテーマにした 15 の文献からは、定義、研究トピック、事例研究の 3 つの主要なテーマが特定された。研究トピックには、（1）職場における過剰適応（千田，2015）、（2）ライフイベントや移行に伴う過剰とその予防と治療（横田ら，2018）、（3）過剰適応の背景要因（本田，2018）の 3 つが挙げられた（表 1）。これらの文献においては、過剰適応が就労場面においてどのように生じるのか、そのメカニズムや影響についての記述に乏しく、今後、検討すべき課題であることが明らかになった。

一方、英語圏の文献も含めレビューした結果、自閉症の就労者が選択し得る対処方略が明らかになった（表 2）。その対処方略は、疲労コントロールとストレスマネジメント（fatigue management and stress management：Raymaker et al., 2020）、適応モーフィング（adaptive morphing：Lawson,

2020), パッシング (passing: (Goffman, 1986, Lawson, 2020; Petrolini et al., 2023)), カモフラージュ (camouflaging: Hull et al., 2017; Lawson, 2020; Petrolini et al., 2023), マスキング (masking: Lawson, 2020; Petrolini et al., 2023), 補償努力 (compensation: Livingston & Happé, 2017), デイスアビリティ・マネジメント (disability management: Raymaker et al., 2020), 過剰適応 (over-adaptation: 石津, 2006) であった (表 2)。これらの対処方略は、いずれもメンタルヘルスに多大な負担とコストを伴うものである。また、ストレスの多い状況を回避・軽減し、周囲からの要

表 1 わが国における自閉症の就労者の過剰適応に関する文献

テーマ	内容
定義	- 自閉症者の過剰適応を説明するための定義 (石津, 2006; 廣川, 2021)
研究トピック	- 就労上の過剰適応 (千田, 2015) - ライフイベントと移行に関連した過剰適応 (横田ら., 2018) - 過剰適応の背景としての自閉症特性 (本田, 2018)
事例研究	- 就労場面における過剰適応の事例 (杉山・高橋, 1994) - カモフラージュのケース (蜂谷, 2020) - ライフイベントと移行に関連した事例 (横田ら, 2011) - 対人関係がテーマになった事例 (本田, 2018)

表 2 自閉症者のストレス対応方略と関連概念の定義

関連概念	定義と説明
疲労コントロールとストレスマネジメント	- 負荷軽減には、時間休や休憩の設定、対人交流活動からの離脱、活動の中止などが含まれる (Raymaker et al., 2020)。 - 健康維持には、緊張緩和を促す運動や活動などが含まれる (Raymaker et al., 2020)。
適応モーフィング (Lawson, 2020)	- 自然な反応であり、欺瞞ではなく、生存のための生物学的なものであり、必ずしも意識的に選択されるものではない。 - 危害から身を隠そうとする状態であり、その状態にある人は、そこに留まり、安全を感じることができる。
パッシング (Goffman, 1986, Lawson, 2020; Petrolini et al., 2023)	- 不利な立場に立たされないように、自分自身に関する内密情報を管理することである。 - 自閉症者のカモフラージュは、非自閉症者としてふるまう、パッシングの一つと考えることができる。 - 自閉症に関連するスティグマの概念と関連する。
カモフラージュ (Hull et al., 2017; Lawson, 2020; Petrolini et al., 2023)	- 自閉症者の行動について説明するもので、家族や学校、職場などの社会的な場面に適応しようとする中で、本来の自分を見失っている可能性がある。 - 自閉症特性を隠し、社会的な場面で使われる補償手段である。
マスキング (Lawson, 2020; Petrolini et al., 2023)	- 自閉症者によく使われることが知られている。 - 自閉症者が社会的な場面での困難を隠そうとする意図や能力を示唆する。
補償努力 (Livingston & Happé, 2017)	- 障害がありつつも、自閉症者の行動が改善されるプロセスを指す。 - 「表面的な補償努力」は、「表面的に社会を渡り歩く (p.735)」ために使われる。 - 比較的柔軟な社会理解のもとでの「深い補償努力」の場合は、必ずしも精神的な健康問題につながるわけではない。
デイスアビリティ・マネジメント (Raymaker et al., 2020)	- 配慮の得られない環境下で、自閉症者が困難を補うために用いる戦略を指す。
過剰適応 (Ishizu, 2006)	- 内的適応を無理に抑制しても、環境要求や期待にできるだけ合わせようとする努力を指す。

求に応えようとし、個人のウェルビーイングを高めるために取られるものである (Hull et al., 2017; Livingston & Happé, 2017)。よって、適応モーフィング、パッシング、カモフラージュ、マスキング、補償努力、ディスアビリティ・マネジメントといったこれらの関連概念は、過剰適応と多くの部分で共通すると言える。英語圏において学術的、臨床的に注目されているこれらの用語は、わが国における自閉症の過剰適応と類似した状態や経験を説明する際に用いられると考えられる。

Autistic burnout および関連概念に関する英語文

献レビューでは、背景因子、対処方略、環境因子、および転帰（自閉症特有のバーンアウト）の4つのテーマが特定された。これらの知見は、今後の研究への示唆を目的として体系的に整理された（表3）。

考 察

過剰適応に関する文献レビュー（表1）と英語圏における自閉症者の対処方略に関する文献レビュー（表2および表3）をもとに、自閉症特有のバーンアウトに至る経路を、「バーンアウトの

表 3 英語圏の研究における過剰適応とその関連概念

トピック	関連概念とテーマ
背景因子	パーソナリティ特性：完璧主義 (perfectionism: Turner, 2024), 失感情症 (alexithymia: Higgins et al., 2021; Mantzalas et al., 2021) 自閉症特性：思考の固さ・感覚過敏 (cognitive rigidity and sensory sensitivity: English et al., 2021), 自己境界の困難さ (boundary-related difficulties: Raymaker et al., 2020)
対処方略	疲労コントロールとストレスマネジメント (fatigue management & stress management: Raymaker et al., 2020) 適応モーフィング (adaptive morphing: Lawson, 2020) パッシング (passing: Goffman, 1986; Lawson, 2020; Petrolini et al., 2023) カモフラージュ, マスキング (camouflaging, masking: Hull et al., 2017; Lawson, 2020; Petrolini et al., 2023) 補償努力 (compensation: Livingston & Happé, 2017) ディスアビリティ・マネジメント (disability management: Raymaker et al., 2020) 過剰適応 (over-adaptation: Hongo et al., 2024; Keating et al., 2024)
転帰	自閉症特有のバーンアウト (autistic burnout: Arnold et al., 2023; Higgins et al., 2021; Mantzalas et al., 2021; Mantzalas et al., 2022; Mantzalas et al., 2024; Raymaker et al., 2020; Raymaker et al., 2022)
環境因子 (World Health Organization, 2001)	(1) 自閉症者における外的要求の能力とのミスマッチ - 自閉症者の能力を超える外的要求 (Higgins et al., 2021), - 周囲の期待と自分の能力とのミスマッチ (Arnold et al., 2023) - 能力第一主義 (ableism: Arnold et al., 2023) - 生活変化ストレス (life-change stress: Raymaker et al., 2020) - 対人交流, 認知・感覚, 仕事の負荷過多 (Higgins et al., 2021) - 自己弁護できない, 環境負荷が限界を超えたと言えない (Raymaker et al., 2020) - 配慮の得られない環境には, 地域社会や対人交流が求められる場面, 社会構造やシステム, 職場などが含まれる (Arnold et al., 2023)
	(2) 自閉症支援やインクルージョンでの障壁 - 自閉症に対する認識不足, 配慮不足, 適切な支援の欠如 (Mantzalas et al., 2021) - 「視点の断絶」, 配慮の欠如, 支援の欠如 (perspective disconnect: Arnold et al., 2023, p. 1910) - サポートへの障壁 (Raymaker et al., 2020) - ガスライティング・否定 (gaslighting/dismissal: Raymaker et al., 2020) - 他者からの誤解や他者への誤解 (Higgins et al., 2021) - 差別とスティグマ (discrimination and stigma: Lawson, 2020; Mantzalas et al., 2021; Raymaker et al., 2022) - トラウマ・インフォームド・アプローチやメンタルヘルス支援の必要性について, 周囲が無理解 (Raymaker et al., 2022)

背景」「保護因子・リスク因子にもなる対処方略と環境因子」「バーンアウトの転帰」のプロセスで、概念図(図1)に示した。実線は文献レビューで特定された「因果関係」や「概念」を示し、点線はわが国における自閉症の就労者に関する著者らの臨床的観察に基づく仮説的な「概念」および「関連(経路)」である。この概念図で示される知見は、自閉症特有のバーンアウトのリスクを軽減するために、(1)自閉症の就労者がより予防的な対処方略を特定し適用できるよう支援すること、(2)メンタルヘルスに有害な環境因子と、バーンアウト予防に有用な環境因子を特定し、環境調整や合理的配慮を行うことの重要性を示している。この枠組みは、就労支援の専門家にとって、自閉症の就労者がリスクを認識し、カウンセリングや相談支援の場面で自身のメンタルヘルス上の課題を理解するための貴重なツールとなる。

環境因子として、次の2つの領域が特定された(表3参照)。一つは、「自閉症における外的要求と能力のミスマッチ(Arnold et al., 2023; Higgins et al., 2021; Raymaker et al., 2020)」であり、2つ目は「自閉症支援やインクルージョンへの障壁(Arnold et al., 2023; Higgins et al., 2021; Lawson, 2020; Mantzalas et al., 2021; Raymaker et al., 2020; Raymaker et al., 2022)」である。加えて、先行研究では、自閉症への理解や支援の不足がストレスの軽減を妨げ、自閉症者が経験するストレスを増大させる要因であること(Raymaker et al., 2020)も指摘されている。さらにわが国における筆者らの臨床的観察から得た知見を議論し、慎重に検討した結果、表3に示した環境因子の中には、多くの有害な促進要因が含まれると結論づけた。また先行研究では、自閉症者と非自閉症者の間で生じる誤解や「視点の断絶(perspective disconnect)」についても指摘されている(Arnold et al., 2023, p. 1910)。これらの知見を検証するためには、自閉症特有のバーンアウトを経験した自閉症の就労者から実体験を聞き取る事例的・質的研究が必要となる。またそれらの研究は、自閉症特有のバーンアウト測定尺度を

用いた縦断的・量的研究とともに実施されることが望ましい。

さらに、これらの環境因子の特定は、自閉症の就労者に対する合理的配慮を行う上で、同僚や雇用主にとって有益な示唆を与える。表3の2つの領域について集められた情報は、雇用主や同僚が業務量や職場環境を評価し、自閉症に配慮した職場づくりを促進し、合理的配慮を提供するための指針となり得る。

結 論

本研究では、わが国における自閉症の就労者の過剰適応に関する研究文献をレビューし、英語の研究文献で扱われている関連概念(完璧主義、失感情症、適応モーフニング、パッシング、カモフラージュ、マスキング、補償努力、ディスアビリティ・マネジメント)との比較を行った。得られたデータを体系的に表に整理し(表2および表3参照)、分析した上で、概念図(図1参照)を作成した。就労支援の実務者は、自閉症の就労者に適切なサービスを提供し、ストレスや過度な負担を最小限に抑える努力が求められる。今回作成した概念図は、自閉症の就労者のアイデンティティを尊重し、無理な変化を強いることなく、就労支援や職場のサポートを評価する指針として活用できると考えられる。また、わが国の自閉症の就労者に関するメンタルヘルス研究が不足する現状は、さらなる研究の必要性を浮き彫りにする。特に、自閉症特性から対処方略、さらに対処方略からバーンアウトに至る2つの経路に対して、正負の環境因子を評価することが必要である。これにより、雇用主や同僚は自閉症の就労者が抱えるメンタルヘルスの課題をより深く理解する一助となるだろう。

本研究では、自閉症と非自閉症の就労者の間で生じる誤解や「視点の断絶(perspective disconnect)」という現象についても取り上げた(Arnold et al., 2023, p. 1910)。職場においては、視点や認識のずれを理解し、自閉症理解を深め、適切な配慮を提供することが不可欠である。一方

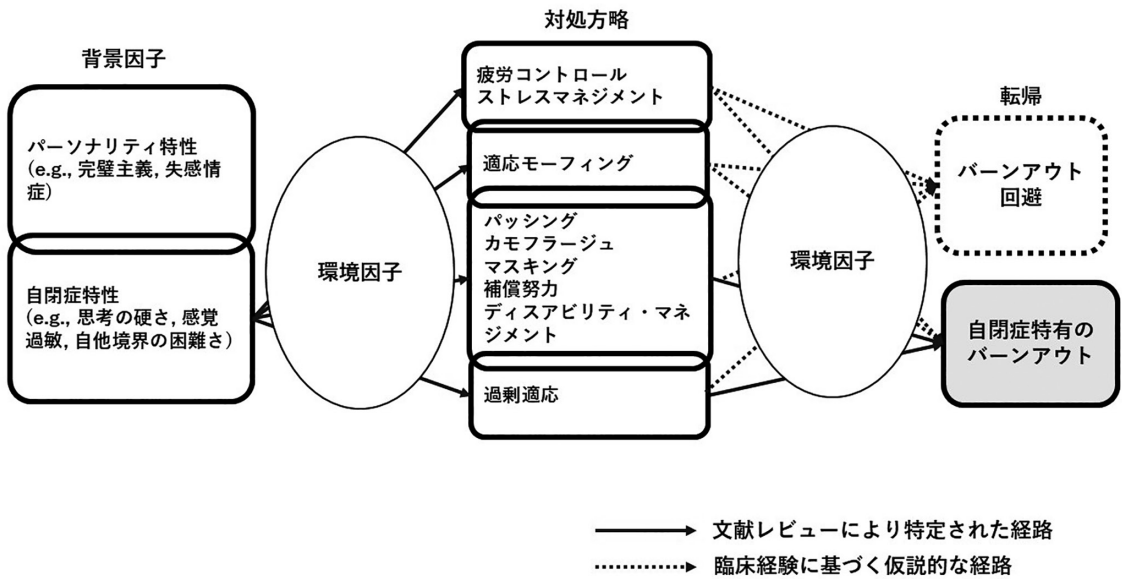


図1 autistic burnout のリスク因子とその関連概念

で、本研究で得られた知見は文献レビューに基づくものであるため、筆者らの臨床的知見と合致するものの仮説の範囲にとどまる。今後、過剰適応や関連概念、自閉症特有のバーンアウトとのメカニズムを明らかにするためには、さらなる研究が必要である。特に事例研究やインタビュー研究などを通して、図1の有効性と適用可能性を評価する必要がある。今後、自閉症特有のバーンアウトの経験者の実体験を研究対象として取り扱うことで、得られる知見は、誤解やコミュニケーションの齟齬を減らす貴重な示唆となるだろう。

謝辞

著者らは、自閉症の学者とのパートナーシップに関する専門知識と研究知見を共有してくださったドラ・M・レイメーカー博士に心からの感謝の意を表します。また、この研究に取り組む上で、いつも重要な洞察と動機を提供してくださる自閉症の利用者にも心からの謝意を表します。本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金(JP21KK0227)の支援を受けて行われました。

文献

- Arnold, S. R., Higgins, J. M., Weise, J. et al. (2023) Confirming the nature of autistic burnout. *Autism: the international journal of research and practice*, 27, 7, 1906-1918. <https://doi.org/10.1177/13623613221147410>
- Chida, W. (2015) Employment support for persons with developmental disabilities in medical institutions. *Japanese Journal of Vocational Rehabilitation*, 29(1), 17-22. (千田若菜. 医療機関からみた発達障害の支援. 職業リハビリテーション, 29(1), 17-22.)
- Chida, W., & Okada, S. (2021) Over-adaptation and camouflage in autism spectrum disorder. *Annual Report of Research and Clinical Center for Child Development*, 25, 57-66. <https://doi.org/10.14943/rcccd.15.57> (千田若菜・岡田智. 自閉スペクトラム症における過剰適応とカモフラージュの臨床的意義. 子ども発達臨床研究, 25, 57-66.)
- Chida, W., Shibata, J., Ogawa, H. et al. (2025) How is autistic burnout perceived and responded to in employment support settings?: An analysis of interviews with employment support professionals. *Vocational Rehabilitation*, 38(2), 2-11. (千田若菜・柴田珠里・小川浩・岡田智. Autistic burnout とは何か ～就労場面における気づきと対処に関する支援者へのインタビュー調査～. 職業リハビリテーション, 38(2), 2-11.)

- Chida, W., Shibata, J., & Okada, S. (2021) Toward an Understanding of “Being Tired Out”: A preliminary survey on Autistic Burnout. *Proceedings of the 48th Annual Conference of the Japan Society of Vocational Rehabilitation*, 130-131. (千田若菜・柴田珠里・岡田智. 「くたびれ果て」への理解に向けて― Autistic Burnout に関する予備調査―日本職業リハビリテーション学会第 48 回大会発表論文集, 130-131.)
- English, M.C.W., Gignac, G.E., Visser, T.A.W. et al. (2021) The Comprehensive Autistic Trait Inventory (CATI): development and validation of a new measure of autistic traits in the general population. *Molecular Autism*, 12, 37. <https://doi.org/10.1186/s13229-021-00445-7>
- Goffman, E. (1986) *Stigma: Notes on the management of spoiled identity*. Simon & Schuster. <https://www.amazon.com/Stigma-Notes-Management-Spoiled-Identity-ebook/dp/B002XQAARW>
- Hachiya, Y. (2020) Women with Autism Spectrum Disorder: Psychological symptoms, medical needs, and chronic pain. *Clinical Psychiatry*, 62(7), 977-984. <https://doi.org/10.11477/mf.1405206141> (蜂矢百合子. 女性の ASD と女性の ASD に併存する精神症状, 医療ニーズ, 慢性疼痛. *精神医学*, 62(7), 977-984.)
- Higgins JM, Arnold SR, Weise J, et al. (2021) Defining autistic burnout through experts by lived experience: Grounded Delphi method investigating #AutisticBurnout. *Autism*, 25(8), 2356-2369.
- Hirokawa, S. (2021) <Review> Reflections on Over adaptation. *Bulletin of the Faculty of Lifelong Learning and Career Studies*, 18, 173-193. <https://doi.org/10.15002/00024315> (廣川進. <研究ノート> 過剰適応をめぐる考察. 法政大学キャリアデザイン学部紀要, 18, 173-193.)
- Honda, H. (2018) Over-adaptive human relationship in some persons with autism spectrum. *Japanese Journal of Psychiatric Treatment*, 33(4), 453-458. (本田秀夫. 自閉スペクトラムの人たちにみられる過剰適応の対人関係. *精神科治療学*, 33(4), 453-458.)
- Hongo, M., Oshima, F., Guan, S., Takahashi, T., Nitta, Y., Seto, M., Hull, L., Mandy, W., Ohtani, T., Tamura, M., & Shimizu, E. (2024). Reliability and validity of the Japanese version of the camouflaging autistic traits questionnaire. *Autism Research*, 17(6), 1205-1217. <https://doi.org/10.1002/aur.3137>
- Hull, L., Petrides, K.V., Allison, C. et al. (2017) “Putting on My Best Normal”: Social Camouflaging in Adults with Autism Spectrum Conditions. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 47, 2519-2534. <https://doi.org/10.1007/s10803-017-3166-5>
- Ishizu, K. (2006) An Attempt to Create an Overadjustment Scale. *Proceedings of the 39th Annual Conference of the Japanese Counseling Association*, 137. (石津憲一郎. 過剰適応尺度作成の試み. 日本カウンセリング学会第 39 回大会発表論文集, 137.)
- Keating C.T., Hickman L., Geelhand P., Takahashi T., Leung J., Monk R., et al. (2024) Cross-cultural variation in experiences of acceptance, camouflaging and mental health difficulties in autism: A registered report. *PLoS ONE*, 19(3), e0299824. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0299824>
- Lai, M.-C., Hull, L., Mandy, W., Chakrabarti, B., Nordahl, C.W., Lombardo, M.V., Ameis, S.H., Szatmari, P., Baron-Cohen, S., Happé, F. and Livingston, L.A. (2021), Commentary: ‘Camouflaging’ in autistic people - reflection on Fombonne (2020). *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 62(8), 1037-1041. <https://doi.org/10.1111/jcpp.13344>
- Lawson, W. B. (2020). Adaptive morphing and coping with social threat in autism: An autistic Perspective. *Journal of Intellectual Disability: Diagnosis and Treatment*, 8(3), 519-526. <https://doi.org/10.6000/2292-2598.2020.08.03.29>
- Livingston, L. A., & Happé, F. (2017). Conceptualising compensation in neurodevelopmental disorders: Reflections from autism spectrum disorder. *Neuroscience & Biobehavioral Reviews*, 80, 729-742. <https://doi.org/10.1016/j.neubiorev.2017.06.005>
- Mantzas, J., Richdale, A.L., & Adikari, A., et al. (2021) What is autistic burnout? A thematic analysis of posts on two online platforms. *Autism in Adulthood*, 4(1), 52-65. <https://doi.org/10.1089/aut.2021.0021>
- Mantzas J, Richdale AL, & Dissanayake C. (2022) A conceptual model of risk and protective factors for autistic burnout. *Autism Research*, 15(6), 976-987. <https://doi.org/10.1002/aur.2722>
- Mantzas, J., Richdale, A. L., Li, X., & Dissanayake, C. (2024) Measuring and validating autistic burnout. *Autism Research*, 17(7), 1417-1449. <https://doi.org/10.1002/>

- aur.3129
- Petrolini, V., Rodríguez-Armendariz, E. & Vicente A. (2023) Autistic camouflaging across the spectrum, *New Ideas in Psychology*, 68, <https://doi.org/10.1016/j.newideapsych.2022.100992>
- Raymaker DM, Teo AR, Steckler AN, et al. (2020) “Having All of Your Internal Resources Exhausted Beyond Measure and Being Left with No Clean-Up Crew”: Defining Autistic Burnout. *Autism in Adulthood*, 2(2), 132-143.
- Raymaker DM, Sharer M, Maslak J, et al. (2022) “[I don’t wanna just be like a cog in the machine]”: Narratives of autism and skilled employment. *Autism*, 27(1), 65-75. <https://doi.org/10.1177/13623613221080813>
- Shiga, T. (2015) Introduction to pervasive developmental disabilities: Basics and reviews. *Japanese Journal of Vocational Rehabilitation*, 29(1), 11-16. (志賀利一．発達障害再入門．職業リハビリテーション, 29(1), 11-16.)
- Sugiyama, T. & Takahashi, O. (1994) A clinical study of youth with autism who could not hold white collar jobs. *Journal of Developmental Disabilities Research*, 16(3), 198-207. (杉山登志郎・高橋脩．就労に挫折した自閉症青年の臨床的検討．発達障害研究, 16(3), 198-207.)
- Turner, T.K.M. (2024) An exploration of the worklife experiences of autistic women in the UK [Doctoral dissertation, University of Hertfordshire]. <https://doi.org/10.18745/th.27768>
- World Health Organization. (2001). International classification of functioning, disability and health (ICF). Retrieved from <https://www.who.int>
- Yokota, K., Chida, W., & Okada, S. (2011) Psychiatric issues in pervasive developmental disabilities: Through 91 Cases of Borderline Intelligence to Severe Intellectual Disability. Tokyo: Nihon Bunka Kagakusha (横田圭司・千田若菜・岡田智．発達障害における精神科的な問題：境界知能から最重度知的障害の91ケースを通して．東京：日本文化科学社)
- Yokota, K., Chida, W., Iiri, C, et al. (2018) Health care transition for intellectual disabilities and developmental disorders. *Japanese Journal of Child and Adolescent Psychiatry*, 59(5), 566-576 (横田圭司・千田若菜・飯利千恵子ら．知的障害と発達障害をめぐるトランジション．児童青年精神医学とその近接領域, 59(5), 566-576)